Web版
一本道
第５号
通巻第７５号

【本誓寺講演録】

令和六年十月二十五日　報恩講より

「一瞬（ひとときき）、一息（ひといき）、一声（ひとこえ）の称名念仏」（第三回）

金沢教区三上組　浄土寺住職　大窪康充　先生

私たちが南無阿弥陀仏に手を合わせ仏のはたらきによって目覚めると言いますが、具体的に何に目覚めると思いますか。ちょっと変な言い方ですけれどもね。そんな難しいことじゃないのですよ。誰もが及ばない何か素晴らしいことに目覚めるとか、簡単なことではない特別な境地に至るとか、そんな話じゃないのです。少し誤解があるかも知れませんが、それは自分の誤りに目覚めることだと思います。

仏教 2500 年の歴史とは、人間が自らの誤りに目覚めてきた、自分の思い込みによる正義・正論を問い質してきた歴史だと思います。「家族のため」、「社会のため」、「あなたのため」と言って、一生懸命に頑張ってきたつもりでも、本当にそうなのだろうか。念仏の声とともに立ち止まって、自分を顧みる、見直していくことによって、時には認めたくない自らの誤りに目覚めていくことだと思います。自分の誤りに目覚めるとは、決して自分がダメ人間になることではありません。むしろ逆で、自分の思い込みによる心の闇が破られることによって一筋の光が差す（「仏」）ということです。それは同時に、教えや尊い言葉（「法」）、そして他人との共感（「僧」）が生まれるということです。

そんな仏教の歴史、すなわち自らの誤りに気づき、確かな方向へと歩まれた尊い人々が実際におられた、そんな歴史の足跡を忘れてはなりません。

釈尊は、二十九歳の時に出家され、六年間ですが極端な苦行生活を送っていました。断食や坐禅などの厳しい修行をして自分を極限にまで追い込んでいく。しかしそこには、苦しみに耐えたという事実だけがあって、その誤りに目覚めた。それは同時に元々あった本当の真実が外から入ってきたのだと思います。

同じようなことが、七高僧それぞれのエピソードとして伝わっています。七高僧とは、念仏を伝えて下さった師として親鸞が仰いだ人物であり、『正信偈』に紹介されています。龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七人です。

第一祖のインドの龍樹（150～250 年頃？）という人は、日本の八宗（倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華厳宗・天台宗・真言宗）の祖師と呼ばれています。龍樹は若い時に隠れ身の術、透明人間になる術を体得したと言います。そして三

人の友人と一緒に、透明人間になってお城の中にしのび込んで、若い女性にいたずらをしたというのです。その結果、三人の友人は殺されて、龍樹がたまたま生き残ったのです。そんな過ちを犯した結果、自分自身の愛欲の深さに目覚め、そして出家されたのです。

第二祖のインドの天親（300～400 年頃）は、若い頃、いろんな難しい勉強ばっかりしていたのですね。そして他者と共に救われるという大乗仏教を批判していたのです。しかし、その誤りに気づいて、深い反省から大乗仏教を批判した自らの舌を切ろうとしたのです。が、それを咎められ、かえってその舌で大乗の教えを伝えることに目覚めたのです。

第三祖の中国の曇鸞（476～542）は、亡くなる十年前まで、道教の不老長寿の教えを学んでおられました。『正信偈』に「三蔵流支授浄教（さんぞうるしじゅじょうきょう）　焚焼仙経帰楽邦（ぼんしょうせんぎょうきらくほう）」と紹介されているように、長生きのための仙術を会得して意気揚々としていたのですが、たまたま都の長安に来られた菩提流支という三蔵法師に浄土の教えを授けられたのです。菩提流支は「君の会得したものは、たかだか何十年長く生きるだけのこと。大海の水に例えれば一滴か二滴の違いにすぎない。本当の長生きとは無量寿に生きることだ」と咎められたのです。曇鸞は自らの誤りに目覚め、道教の書物である仙経を燃やし浄土の教えに帰依したのです。

第四祖の中国の道綽（562～645）は、もともと禅や戒律を学んでいました。しかしそれは、自己完結・自己満足の世界に過ぎないと思ったのか、その限界を知って浄土の教えに帰依したのです。

第五祖の中国の善導（613～681）、第六祖の日本の源信（942～1017）、第七祖の日本の源空（1133～1212）については省略いたしますが、いずれにしても誰もが、これまで歩んできた誤りに一度は気づき目覚めることによって、尊い教えに出あい、他人と共感する世界が生まれてくる、そういう物語が伝わっているのです。

さて、私は来年で六〇歳、還暦になります。ここにおられる本誓寺住職にこれまでいろいろと厳しいことを言われました。ただ、その言葉には、本当の自分を言い当てられた、ということもありました。口ではお寺のため、ご門徒のため、家族のためと一生懸命に頑張ったつもりでも、結局はそうじゃない、自分のためだけに頑張っていたようですね。自分だけの狭い世界で生きてきたようですね。

先日、このようなことがありました。長い間、義母の介護でご苦労された奥さんとお参りしていました。私はふと思い出したかのように、「そう言えば、あなたずっと介護していたでしょ、何年介護した？」と何気なく聞いたのです。すると「三、四年かな……」と。私がつくづく「本当に大変やったんやね」と言うと、「住職、やっとわかってくれた」と言わんばかりに、涙を流されたのです。私自身、父親の介護を通して、その経験

から出た言葉がはじめて相手に届いたのでしょうか。これまでのお参りの時、たわいもない話の中で、「あんた大変やったね」、「頑張ってね」などと、後から思えば上から目線で励ましの言葉を言っていたのでしょうね。まさしく口先だけの他人事に過ぎないものだったのでしょう。これまでのお参りは一体何だったのか、自分の偽善が暴かれた瞬間でした。

親鸞聖人は、次の『観無量寿経』にもとづく善導の言葉を大事にされました。

「もし弥陀仏を称すること一声するに、すなわちよく八十億劫の生死の重罪を除滅す」（「真宗聖典」1版　P175）

たった一声念仏を称える。すると八十億劫という永遠なる生死の重罪が除かれるというのです。どういうことでしょうか。何か自分が悪いことをして、念仏を一回称えてチャラになる、そんな話じゃないですよ。永遠なる生死の重罪とは、人類が背負ってきた罪だと思います。自分中心の狭い眼によって過ちを犯し続けてきた、その自らの誤りにこの私自身が目覚めた瞬間、これまで人類が背負ってきた重罪が一瞬で除滅されるということだと思います。ただ、除滅されるのも一瞬だけです。念仏を忘れれば、すぐに重罪を背負う生活に戻ってしまう。

一声の念仏によって目覚める、逆に目覚めるためには一声でいい、そして閉塞した心が開かれる一瞬の念仏を頂くということです。いつも塞がっている心、すなわち自分の思い込みの中で生きていた自分が、念仏の一声によって破られる、そして光が射す。そこに必ず仏の教えが入ってくる。そして他人の悲しみ喜びが、自分の悲しみ喜びとなって共感する世界が広がっていくのです。すべてが一瞬一瞬ですよ。

曇鸞が大事にされた言葉の一つに「たとえば千歳の闇室に、光もししばらく至れば、すなわち明朗なるがごとし」（「真宗聖典」1版　P274）とあります。千年間ずっと真っ暗な部屋に光が射すと明るくなります。千年間真っ暗だからといって、その部屋が明るくなるためにはなにも千年は要らないのです。一瞬なのです。だから私だけじゃない、私の親もその親も、人類がずっと背負ってきた「心中閉塞」、心の中が閉塞した状態で、他者を排除したり傷つけたり。そんな考えもしなかった自らの罪に気づかされる。自分の誤りに素直にうなずいていくところに、光が射し、心の中が明朗になるのだと思います。そういうことからも、私たちは一瞬一瞬の大切ないのちを生きているのです。

先に紹介させていただいた一瞬のうちに亡くなった能登の方がおられました。その方を改めて偲ぶとき、私たちは本当に一瞬一瞬のいのちを生きているのでしょうか。どうでしょう。私自身、本当に一瞬一瞬を味わって生きているのだろうか。「美味しいな」、「ありがたいな」、「楽しいな」、「苦しいな」、そういう素直な感情を覆い隠し、誤魔化しているということは、一瞬一瞬のいのちを本当に生きていることにならないのではないでしょうか。「嬉しいな」、「悲しいな」と素直になればこそ、

目の前に一緒に悲しんでくれる人がいる、共に喜んでくれる人がいる。こんな宝ものがありますか。そんな宝ものが念仏の声を通して、私に届いてくれているのです。これ以上の宝ものはありません。もちろんお金も大事です。健康も大事です。いろいろと大事なものがあるかと思いますが、限られたいのちを生きるものとして、本当に何が大事なのかを考えてほしいと思います。まさしく尊いものに目覚め、尊い教えに出あい、尊い人と共感していく、そんな念仏を称えることにこそ、私にしかない人生の本当の豊かさを教えてくださるのだと思います。

第四回に続きます。

講師紹介　大窪（おおくぼ）　康充（こうじゅう）

昭和四十年石川県白山市（旧松任市）生まれ。金沢教区第三上組浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院前指導主任。著書に『念仏の音が聞こえるとき『正信偈』『歎異抄』との対話』（法藏館）、『念仏の声が宝となるとき 生活にいきる『教行信証』のことば』（法藏館）、『合利佛の物語 阿弥陀経の黙った主役』（京都月出版）など。